

「音楽実技」における非対面型授業の課題と可能性

～ プレ導入に関する調査から ～

Problems and Possibilities of Non-Face-to-Face Class in a Musical Skills Class
— Based on a survey from pre-introduction —

児童学科 川上 健太郎* 根津 知佳子
Dept. of Child Studies Kentaro Kawakami Chikako Nezu

*日本女子大学学術研究員

抄 録 新型コロナ・ウイルスの蔓延に伴い、多くの高等教育機関において、「音楽実技」の授業形態に非対面型授業を導入することが求められている。本研究では、学修環境や指導環境の異なる状況下でプレ導入した“学生による音源提出+実技指導者によるコメント”という非対面型授業における課題や可能性を明らかにすることを目的とする。非対面型授業に関わる実技指導者を対象とした調査で得られたローデータを加工し、統合することによって、4つの課題や可能性が提示され、円滑な本導入のための改善の視点が明らかになった。

キーワード：「音楽実技」、非対面型授業、ICT の導入

Abstract Due to the spread of the new coronavirus, it is required for institutions of higher education to offer non-face-to-face class for ‘Musical Skills’. The purpose of this study is to clarify problems and possibilities of non-face-to-face class (the students’ submission of the sound source and the teachers’ comments) that was pre-introduced under the various circumstances of the students’ learning environment and the teachers’ teaching environment. By processing and combing the raw data collected in the investigation of the several teachers who got involved with the class, four problems and possibilities were identified and improvement for the smooth introduction was clarified.

Keywords: Musical Skills Class, Non-Face-to-Face Class, the introduction of ICT

1. 研究の背景と目的

新型コロナ・ウイルスの蔓延による日本における感染者数の増加に伴い、主に大学を中心とした高等教育機関において対面型の授業は、非対面型のオンライン授業に移行を余儀なくされた。

全国における高等教育機関での「音楽実技」では、インターネットを利用した同時双方向型の授業形態の導入が確認出来たものの、実技指導者と学生の両者の通信環境や学生の学修環境の整備が充分とは言えない体制下では、その導入に踏み切らなかった高

等教育機関も見られた。例えば、感染拡大予防のために入構制限下にある首都圏A大学児童学科においても、学生だけではなく、実技指導者に対する事前聞き取りを通して同時双方向型の授業の導入が困難であることが確認されたため、「音楽実技」において、“学生による音源提出+実技指導者によるコメント”（以下、非対面型授業もしくは非対面型レッスンと記す。）という非対面型授業のプレ導入を決定するに至った。学生は音源を自宅などの生活環境の中で録音・録画し、インターネットの教育支援システムを通して実技指導者と音源を共有する。実技

指導者は、表現だけではなく姿勢や身体の使い方も含めて、ウェブ上で総合的なコメントを書き込むという新しい試みである。

本来、対面型の形態をとることが多い「音楽実技」ではあるが、非対面型の形態を通しての「音楽実技」における学びについて論考した国内の先行研究では、深見・中平ら（2008, 2009）^{1) 2)}が挙げられる。深見・中平らは対面型授業の時間数の不足を補うために学生に演奏の練習成果を録画・提出させており、その行為がピアノの実技能力の向上に一定の効果をもたらすという結論を得ている。しかし、演奏の映像の撮影には、大学の練習室に設置された企業と開発した特殊な録画装置を使用しており、学生の生活環境の中で録音・録画した音源を実技指導者と共有するという状況と比較することは困難である。

又、非対面型の学びでは ICT (Information and Communication Technology) の利用が不可欠であることについて、小林 (2014)³⁾、竹下 (2018)⁴⁾などの先行研究が見られるが、いずれも授業外のピアノの自主練習に焦点を当て、ICT の効果的な導入とその効果について論じているため、非対面型の授業内での ICT の使用や授業形態については想定されていないといっても過言ではないだろう。

以上より、A 大学でプレ導入された非対面型授業についての先行研究は管見の限り見られない。そこで、実技指導者と学生の日常生活の中にある ICT の活用のもとに、この非対面型授業がもたらす課題や可能性を明らかにすると同時に、プレ導入における問題や学習者と実技指導者の不安を可能な限り取り除き、円滑な本導入に寄与出来るようにするための視点を得ることを研究の目的とする。

2. 研究方法

2-1 研究のモデル

本研究では、“プレ導入における”非対面型授業の実践報告を実技指導者から得たローデータを基に記述し、「プレ導入→本導入」という一連の流れを視野に入れて研究を進めていく。つまり、授業実践と調査を往還しながら進める形態をとる。

なぜならば、未曾有の状況下にあるため A 大学と同じ形態のレッスンに関する実践報告が当然見当たらないことから、この新形態レッスンの導入について記述していく際に“探検的”な視野をもって取り組む必要がある。この2点を考慮した際、川喜多

(1967) の W 型問題解決モデル⁵⁾ (図 1) を用いるのが妥当であると考え。非対面型授業のプレ導入から本導入までを“一仕事”と捉えた上で、問題提起 (A) から探検・観察を経て、情報から発想した仮説 (D) を導く。よって、このモデルを現況に当てはめると、プレ導入は A→D に該当すると言える。

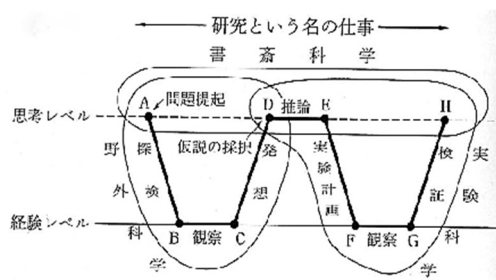


図 1 W 型問題解決モデル

2-2 ローデータの収集

ローデータの収集には、一般的にブレン・ストーミングなどを通して事象に関わる人物からローデータを収集する例が見られる⁶⁾。学生と実技指導者の両者からローデータを収集することが望ましいが、現況の中、学生の安全面の保障という点を第一に考慮するため、プレ導入に関わった実技指導者6名の中から無作為に抽出した4名に段階的にウェブ上でオープン・エンドの形式である質問紙への回答をしてもらい、ローデータを収集した。回答者の匿名性を担保するため、回答者の性別・年齢代は明かさないが、どの実技指導者も高等教育機関に複数年勤務しており、従来の対面型授業との比較を十分に記述出来る資質を持つと判断した上で、回答を依頼している。調査期間は、このプレ導入が実施された期間を含む2020年8月14日～9月16日である。

2-3 ローデータの加工と統合方法

本研究では、前述したW型問題解決モデルを用いて研究を進めていくが、収集したローデータをまず加工した後、整理し、まとめていく必要がある。この一連の作業を遂行していくにあたり、川喜多 (1967) の考案した KJ 法を用いる。KJ 法は、ラベルづくり、グループ編成、A 型図解化、B 型文章化の4つのステップから構成されるが、これらのステップを経ることで調査によって得たローデータをまとめ、整理し、問題解決への仮説を得ることが出来る。

ローデータの加工に当たっては、質問紙への回答で得られたデータを筆者らが単位化・圧縮化し、ラベルを作成した⁷⁾。ラベルの後に記されたA～Dの文字はそれぞれの実技指導者を示す。又、本研究では、上記で述べたW型問題解決モデルに沿ってKJ法を展開する6ラウンド累積KJ法⁸⁾(図2)を使用することとする。この際、本研究ではプレ導入における問題解決を目的としていることを考慮すると、図2における第1ラウンドから第3ラウンド+評価までを遂行することとなる。

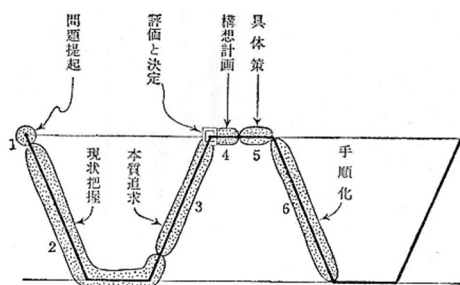


図2 W解決に位置付けた6ラウンド累積KJ法

3. 研究結果

6ラウンド累積KJ法における第1ラウンド・第2ラウンド・第3ラウンド+評価の各ラウンドについての分析結果を以下に記す。

3-1 第1ラウンド(問題提起ラウンド)

3-1-1 ラベルづくりとグループ編成

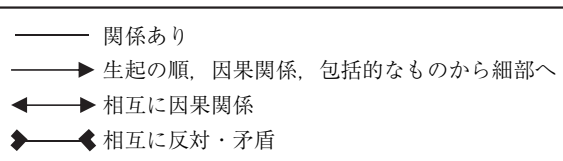
第1ラウンドでの実技指導者へのオープン・エンドの質問は以下の通りである。

非対面型授業の試みを聞いた際、どのような印象をもちましたか？先生が当初抱いた授業に対する期待や不安など自由にご記入下さい。以前、他の形態でピアノのレッスンをされていた先生は、その比較について言及して下さいも結構です。

第1ラウンドにおける全ラベルは22枚、小グループ表札8枚、中グループ表札4枚、4つの島に分類された。

3-1-2 A型図解

図3に細部図解を記す。各記号の意味については、以下の通りである。



3-1-3 B型文章化

B型文章化では、叙述と解釈を区別して書くことが求められる⁹⁾。よって、得られた表札には下線を引き、解釈の文や補足説明には()を記す。又、このラウンドでは、細部図解における小グループ表札・中グループ表札のみを記載した索引図解を基に文章化する。

I 対面型レッスンの醍醐味

対面型レッスンの醍醐味として①実技レッスンにおける表情を見ながら情報を共有する重要性和②連続的なライブ感を味わえる対面型レッスンにおける学びや体験を挙げている。

II 実技指導者が非対面型レッスンに抱く不安

(上記に記した対面型レッスンの醍醐味とその教育的な意義を知っているが故に)実技指導者は非対面型レッスンに不安を抱いている。まず、③従来の対面型レッスンから非対面型レッスンに適應できるか不安である。又、(対面型レッスンで使うような表現は使えないことが懸念されるため、)④対面型レッスンと違いどのような言葉で伝えるべきか不安である。

III 学生の学修環境と実技指導者のICT利用のサポート体制の整備の必要性

⑤実技指導者と学生の通信環境の把握とICTの活用が必要であることにも実技指導者は不安を抱いている。(この非対面型レッスンを導入出来るか適切に判断した上で)⑥学生の練習環境の確認と音源の提出を円滑にするサポートが求められる。(実技指導者の授業に向けての)準備に関わる手間や、どの実技指導者にも利用出来る汎用性(簡潔さ)、学生の学びへの確かなつながりの保障等を勘案すべきである。

IV 非対面型レッスンの可能性と実技指導者の抱く期待

実技指導者は非対面型レッスンの可能性に期待している。学生の安全を確保しつつも学びの機会を保障することを始めとして⑦実技指導者の抱く非対面型レッスンに対する展望に関する意見も確認出来た。又、「音楽実技」での学生一人あたりのレッスン時間は、充分であるとは言いが、定められた時間の中だけではなく、フレキシブルに対応出来るため、⑧非対面型レッスンのもたらす実技指導者が一人一人の学生と向き合う時間・機会の保障という可能性も見いだせた。

3-2 第2ラウンド (現状把握ラウンド)

3-2-1 ラベルづくりとグループ編成

第2ラウンドでの実技指導者へのオープン・エンドの質問は以下の通りである。

学生によって提出された音源を視聴中に得られた知見や気づかれた点などありましたらご記入下さい。

第2ラウンドにおける全ラベルは 21 枚、小グループ表札6枚、中グループ表札2枚、4つの島に分類された。

3-2-2 A型図解

図4に細部図解を記す。

3-2-3 B型文章化

このラウンドでも索引図解を中心に文章化する。

I 学生の心理状態・生活環境の公開への配慮の必要性

(対面型レッスンでは、学生にとって緊張感を伴う場であるが) ①対面型レッスンと比べた学生の心理状態の解明の必要性がある。又、②学生の生活環境の公開という問題も生じた。(よって、学生の声に耳を傾けることも必要であるが、) 知らない実技指導者に聴かせる目的で音源を提出することについて学生は、どのように思い、練習に励み、録音(録画)しているのだろうか。

II 電子ピアノを使用した音源に対する印象

電子ピアノの打鍵音によって音が聴きにくいという問題や(本来、学生によって異なるはずの)音色が均一化してしまい、それぞれの個性が埋没化して

しまう印象があった。

III 音声ファイルと動画ファイルの双方における情報量の制約とコメントの質への影響

動画ファイルと比較した場合、音声ファイルの方が得られる情報量が少ないため、③音声ファイルによって得られる情報量は僅少である。又、動画ファイルでも④動画の撮影方向によって情報量は制約される。以上から、学生より提出されたデータの形式(音声・動画ファイルか)によって得られる情報量は異なり、データの形式がコメントの質に直接影響を及ぼすという印象をもつに至った。

IV 非対面型レッスンの学修効果への疑問

学生の演奏における間違いを実演で指摘できないこと、初心者への学習への大きな負担が懸念されること、左右反転した動画などのアクシデントへの対応を含め、同じ空間を共有して音楽を味わうことが出来ないことに少し違和感を持つ。

3-3 第3ラウンド (本質追及ラウンド+評価)

3-3-1 ラベルづくりとグループ編成

第3ラウンドでの実技指導者へのオープン・エンドの質問は以下の通りである。

非対面型レッスンを通して、このレッスンの功罪(メリットとデメリット)についてご記入下さい。従来のレッスンとの比較を通してのご意見でも構いません。

第3ラウンドにおける全ラベルは 28 枚、小グループ表札 10 枚、中グループ表札 3 枚、大グループ表札 1 枚、4つの島に分類された。

3-3-2 A型図解

図5に細部図解を記す。

3-3-3 B型文章化

このラウンドでは、図5の細部図解を基に文章化を行う。

I 耳の育成・音の感受性の涵養に関する課題

従来のレッスン形態と比較し、心のどこかで「従来の方法が良いものだ」と思いこんでしまっているため明確なメリットを見いだせない。まず、実演を

示しながらレッスンを進めることが出来ない。(その結果、) 対面型レッスンでは、一言の助言や実演で解決することでも、即座に助言したり、実演することが出来ない分、学生の進歩に時間がかかる。又、「sub p」のようなピアノの実演によって(のみ)簡単にその音楽的な効果が感覚的に共有されるものも言葉でのみ伝えるとなると音楽的な感動を伴わずに冷静な学びの中で完結してしまう。これらから①実技指導者のライブでの実演がもたらす音楽的な感動を伴った学びの不足という点が挙げられる。次に、音源を視聴している際には、音がクリアに聴こえないこと・雑音が楽器のせいなのか、または環境によるものか判別しにくいことから②不鮮明な音質と音源に含まれる雑音という問題も指摘される。

II レッスンでのコメントにおける制約

まず、お互いに顔を見てコミュニケーションをとれない分、コメントにおける表現が婉曲的になる。(その結果、) 学生の演奏に対しての実技指導者のコメントの情報量が対面型レッスンに比べ必然的に多くなることから③対面型レッスンとはコメントの質と量が異なると言える。

次に、④文語体による表現を駆使する必要性がある。(①の実技指導者の実演という行為とも関連するが) “こんな感じ” という音楽独特の感覚的な伝授が難しくなったことはデメリットとして感じた。又、指揮をするなど身振り手振りを交えて表現を伝えることが出来ない。その結果、実技指導者は、対面型レッスンの時に使う口語体の言葉ではなく、コメントの際、文語体の表現を使わなければならない、相当な日本語力によってカバーしていくことが必要になるのではないだろうか。

(③・④の双方を考慮した上で実技指導者はコメントしていかなければならないが、) ⑤音源における情報量の制約はコメントの質に影響を与える。映像なしの音声ファイルの場合、指・姿勢等、演奏をする上で大切な所が見えないので、この点について助言することが出来ない。(動画ファイルであっても) 録音・録画機材の設置場所によっては、実技指導者が見たい方向から学生の手や指を見ることが出来ない。つまり、学生の提出した音源の形式に関わらず、コメントに制限が生じるということである。

III コメントの制約をカバーするための工夫

学生が動画で課題を提出してくれた場合、実技指導者も言葉のみのコメントでなく、動画でのコメントの返信が可能ではないか、楽譜を添付することで言葉のみでは伝えづらい情報を学生と共有出来るという回答から、コメントの制約をカバーするための工夫も示唆された。

IV 非対面型レッスンの可能性と明るい展望

まず、どのような視点から非対面型レッスンを評価していくべきか熟考が必要であるが、課題を考慮した上で、非対面型レッスンの可能性と明るい展望について考察する。

一点目は、⑥ICT 導入による新たな学びの形の発見である。III で言及した動画でのコメントに関連するが、動画の再生可能性という特性に依拠した学びへの期待・学生の提出した音源の蓄積による学生の成長過程のポートフォリオ化の可能性が挙げられた。

二点目は、⑦ICT 機器の利用がもたらす学修効果である。学生は、自分の演奏を録音して聴く機会はほとんどないため、自分の演奏を客観的に聴ける良い経験となる。又、(ある程度の完成度が担保されたパフォーマンスを提出する学生が多かったことから、) 学生が自分自身の演奏に納得をするという自分にとっての成果を確認出来る側面が対面型レッスンよりも前面に出ていると感じる。そして、学生が自分なりに曲を仕上げている場合、実技指導者は演奏の良い点や改善点などについての指導もしやすい。

最後に、学生の演奏を聴く時間・回数の柔軟な選択、演奏に対してのコメントを熟考する時間の確保という点で、⑧実技指導者が時間による制約を受けないという利便性が挙げられる。

3-3-4 評価

10 の小グループを評価単位のユニットとして設定した。3つのラウンドにおけるオープンエンドの質問紙に回答した実技指導者4名を対象に、図解を提示し、次のような評価基準を設けた。

- | |
|-----------------|
| 1 番重要だと思う：5 点 |
| 2 番目に重要だと思う：4 点 |
| 3 番目に重要だと思う：3 点 |
| 4 番目に重要だと思う：2 点 |
| 5 番目に重要だと思う：1 点 |

以上の回答をウェブ上で回収し、各々のユニットの合計点を集計した。図5では、ユニットを塗りつぶした色によって階級を区別している。

4 考察

第3ラウンドにおいて得られた仮説と評価を中心に、考察していく。この際、他のラウンドで得られた表札・ラベルとの関連性も指摘していく。

(i) ①実技指導者のライブでの実演がもたらす音楽的な感動を伴った学びの不足 (17点)

実技指導者3名が5点をつけていたことから本ユニットの非対面型レッスンにおける重要度はかなり高いと考えられる。第1ラウンドにおいて、連続的なライブ感を味わえる対面型レッスンにおける学びや体験について言及したが、実技指導者は、これを「I 対面型レッスンの醍醐味」の一つであると捉えている。又、第2ラウンドの「IV 非対面型レッスンの学修効果への疑問」では、学生の間違いを（音による）実演で指摘できない点も指摘している。これらの表札より、実技指導者は、（ライブの）実演による学びや体験を学生が享受出来ないことを非対面型レッスンの一番の課題として捉えていることが分かる。

(ii) ⑤音源における情報量の制約とコメントの質への影響 (9点)

この表札は、第2ラウンドにおける「III 音声ファイルと動画ファイルの双方における情報量の制約とコメントの質への影響」という表札と同義であることは、それを構成するラベルを確認しても明白である。音源ファイルにおいて、得られる情報量は、動画ファイルよりも音声ファイルのほうが僅少であることから、実技指導者は学生が動画ファイルで音源を提出することを推奨したいと考えるかもしれない。しかし、第2ラウンドにおける「②学生の実生活環境の公開という問題」についての配慮も同時に必要である。音源の形式によりコメントの質が異なるという旨を学生に事前に伝えた上で、形式の選択を学生自身に委ねるべきと考える。

(iii) ④文語体による表現の駆使の必要性 (8点)

実技指導者は対面型レッスンでは口語体の表現をメインに使用し（時には文語的な表現も織り交ぜながら）、演奏に対してコメントするのが慣例である。よって、プレ導入の前である第1ラウンドの段階で

既に、④対面型レッスンと違いどのような言葉で伝えるべきか不安という表札が存在するのは興味深い。この段階では、漠然とした概念であったものの、プレ導入での経験を通して、実演やジェスチャーなしで学生に如何にして情報を伝えるか文語体による表現でのコメントの必要性を悟ったと言える。つまり、たとえ抽象的な概念であっても、実演やジェスチャーに依存せずに学生に情報を伝えなければならず、これは相当な日本語力を要求されていると言える。しかし、第3ラウンド①の表札でも言及したように、このように言葉のみで伝えることによって音楽的な感動を伴わない冷静な学びに繋がってしまうという危険性も孕んでいる。

(iv) ⑦ICT 機器の利用がもたらす学修効果 (7点)

非対面型レッスンにおける明るい展望に目を向け評価をした実技指導者も見られた。第1ラウンドでの「③従来の対面型レッスンから新形態レッスンに適應できるか不安の表札や、第2ラウンドでは「IV 新形態レッスンの学修効果への疑問」の表札が存在していたにも関わらず、第3ラウンドで初めて具体的な学修効果に関するポジティブな表札が形成されたのは興味深い。音源を視聴した際、ある程度の完成度が担保されたパフォーマンスを提出する学生も多かったことから、実技指導者によるコメントのみに依存することなく、“自律した学修”を遂行する学生も少なからずいたのではないかと推察される。

(v) ⑥ICT導入による新たな学びの形の発見 (5点)・学生の演奏に対してのコメントを熟考する時間の確保 (5点)

双方とも新形態レッスンの可能性を示唆したラベルであると言える。動画の再生可能性という特性に依拠した学びへの期待は「III コメントの制約をカバーするための工夫」における実技指導者による動画での返信の可能性のラベルとの関連性を指摘出来る。又、学生の提出した音源の蓄積によって学生の成長過程をポートフォリオ化出来るという可能性については“成果”の可視化という点で非対面型レッスンにおける新たな可能性を秘めていると言える。学生の演奏に対してのコメントを熟考する時間の確保の表札については、対面型レッスンでは、学生の読譜の誤りを訂正する時間が増えてしまう反面、学生一人一人の本質的な課題を実技指導者自身が思索する時間がなかなか確保出来ないことから“時間に

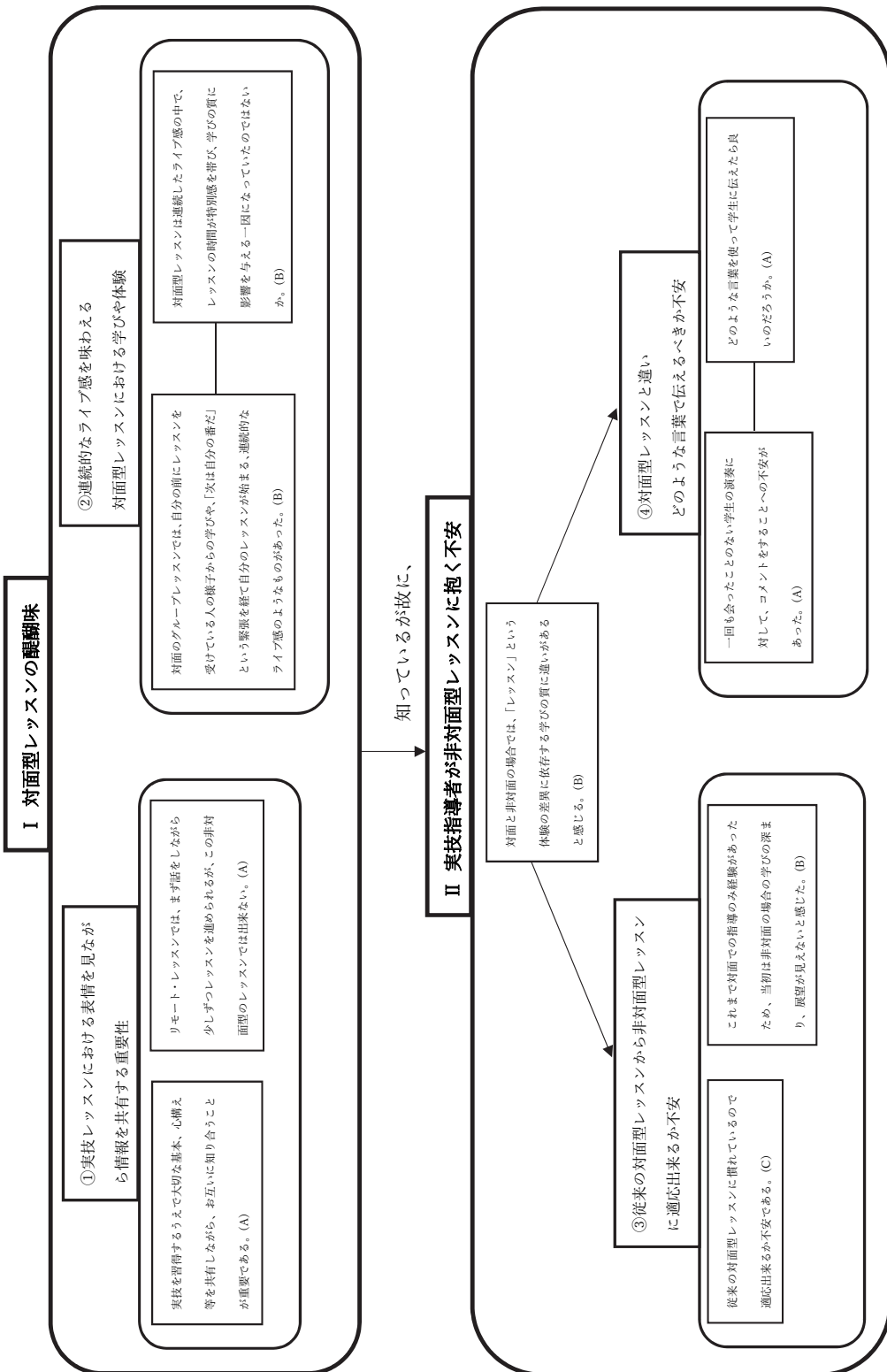
よる制約を受けない”という点を実技指導者はポジティブな側面として捉えたと考える。

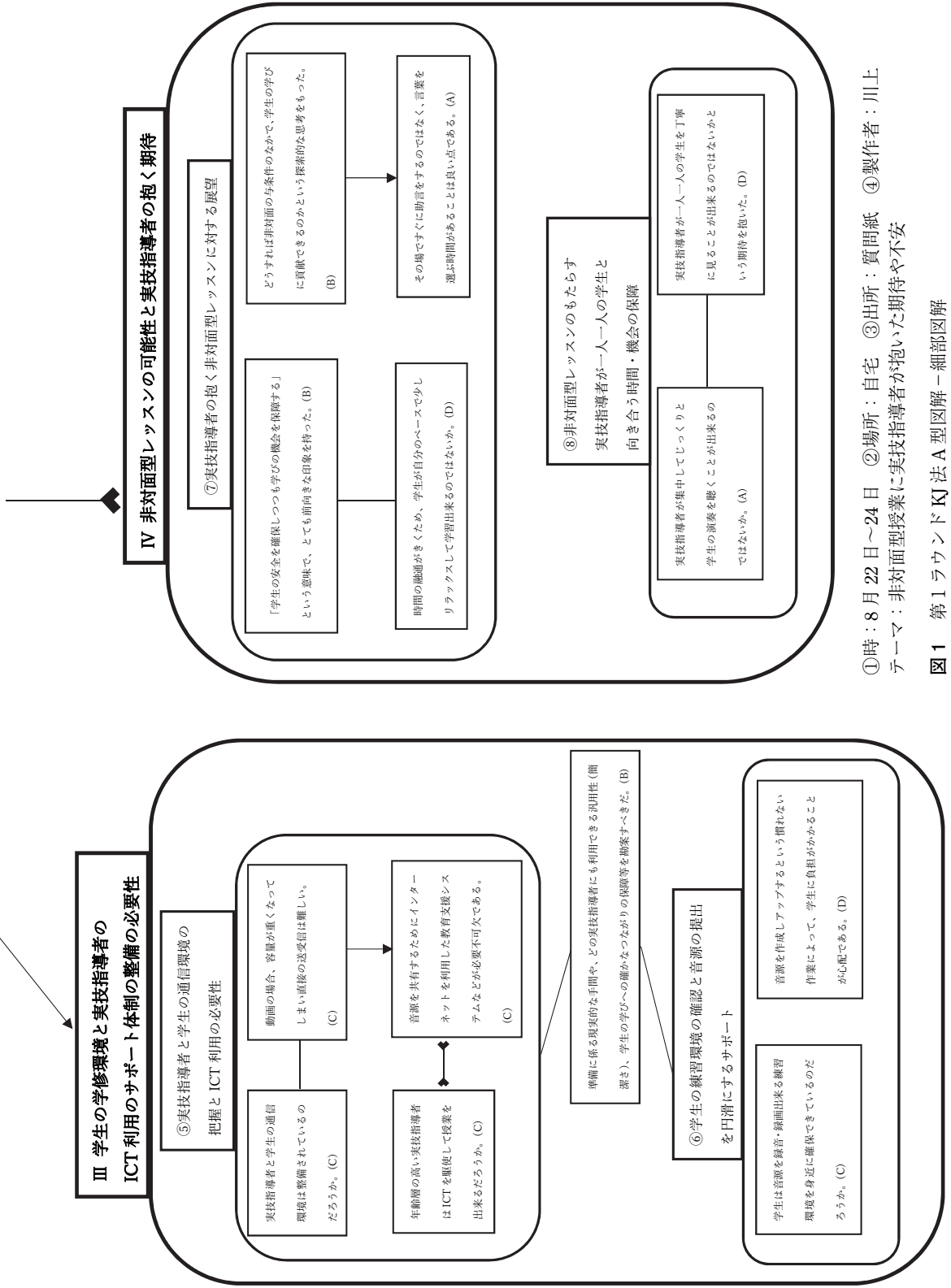
5. まとめ

本研究では、プレ導入での調査を通して、「音楽実技」における“学生による音源提出+実技指導者によるコメント”という非対面型授業の課題や可能性を提示した。3つのラウンドを通して課題や可能性として4つの発想が得られ、評価によって実技指導者が本導入に向けて何を重視して授業を実践していくべきかの仮説を得た。又、ローデータをプレ導入に関わった実技指導者から収集し、6ラウンド累積 KJ 法を用いてデータを統合することで、累積的に発想を得ることが出来た。本稿では、6ラウンドの前半部分(+評価)までの遂行をまとめたが、本導入に向けての後半部分(構想計画・具体策・手順化)の施行については今後の研究課題とする。

<注>

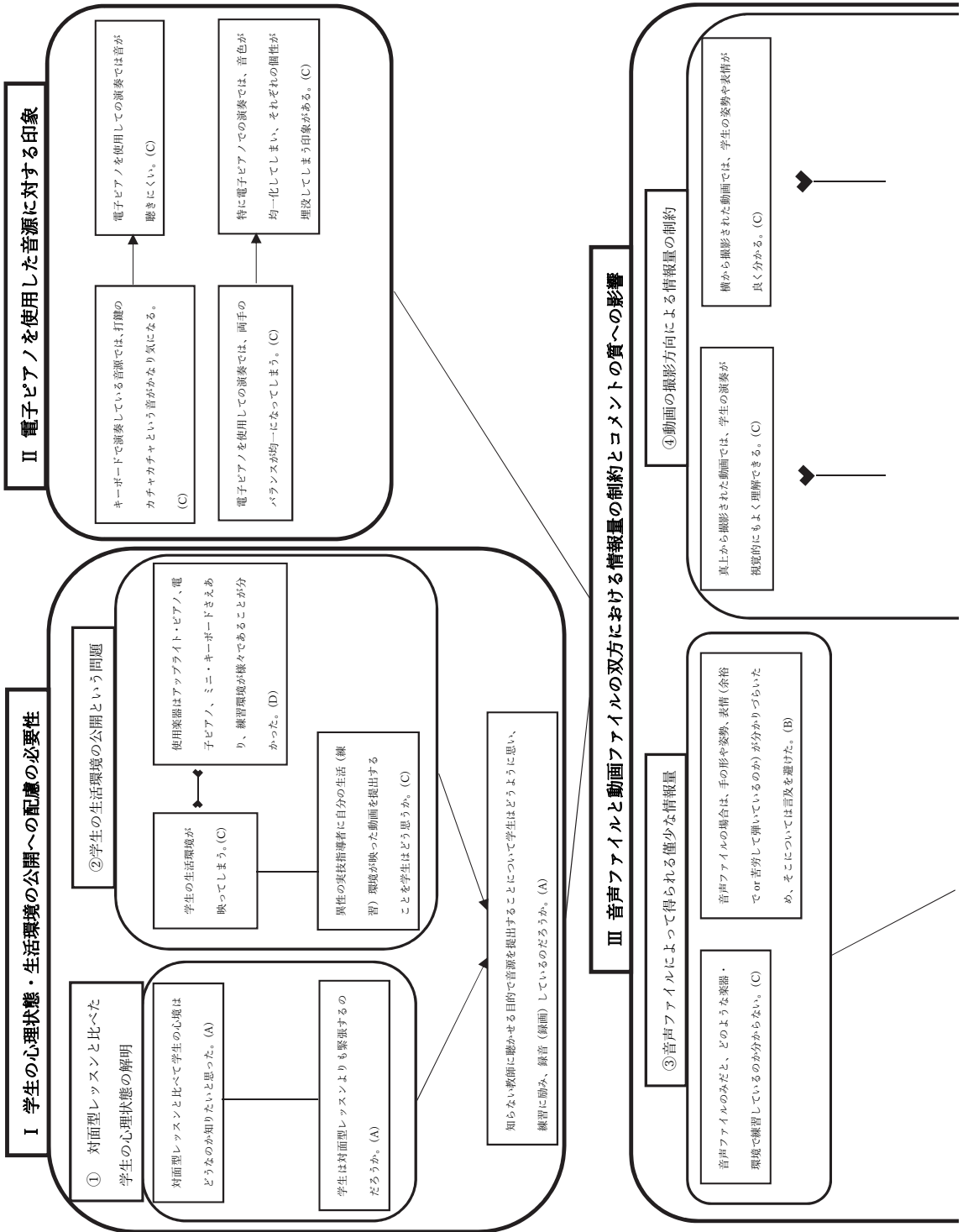
- 1) 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希：ピアノ弾き歌い実技指導における練習映像提出併用の効果 京都女子大学発達教育学部紀要 (4) pp.19-27
- 2) 2008年
深見友紀子・中平勝子・赤羽美希：ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題 京都女子大学発達教育学部紀要 (5) pp.31-40
- 3) 2009年
小林恭子：ピアノ独習におけるインターネット動画教材の活用と有用性 目白大学高等教育研究 (20) pp.75-82 2014年
- 4) 竹下則子：養成校における主体的・対話的なピアノ学習の試み：ICT(情報機器)の活用を中心に びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要 (10) pp.167-176 2018年
- 5) 川喜多二郎：発想法 創造性開発のために 中央公論新社 p.23 1967年 第2図
- 6) 川喜多二郎・牧島信一：問題解決学—KJ法ワークブック 講談社 pp.26-27 1970年
- 7) 前掲 川喜多二郎・牧島信一：問題解決学—KJ法ワークブック p.31
- 8) 川喜多二郎：続・発想法 KJ法の展開と応用 中央公論新社 pp.134 1970年 第22図
- 9) 前掲 川喜多二郎：発想法 創造性開発のために pp.103-107

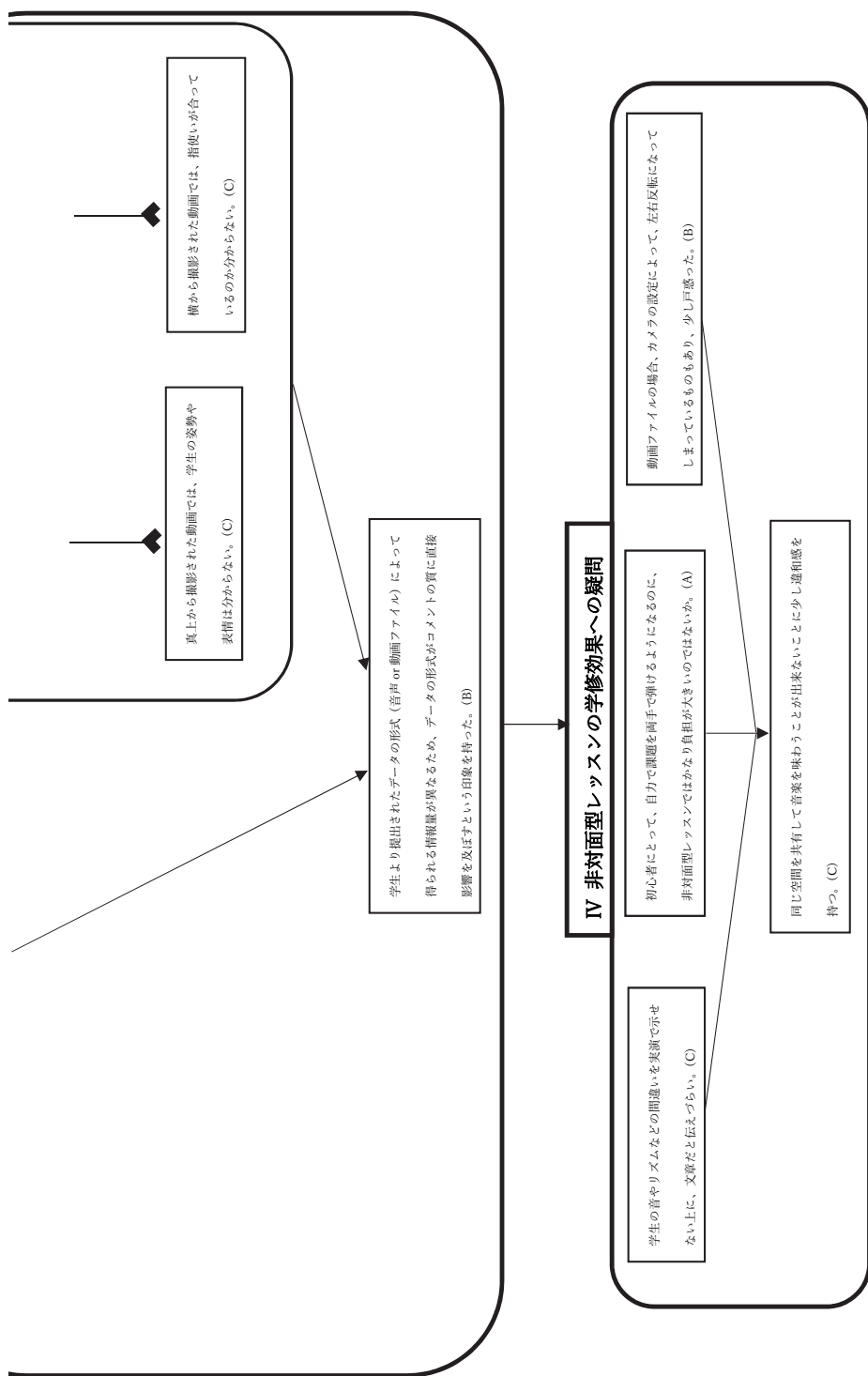




①時：8月22日～24日 ②場所：自宅 ③出所：質問紙 ④製作者：川上
 テーマ：非対面型授業に実技指導者が抱いた期待や不安

図1 第1ラウンドKJ法A型図解－細部図解





テーマ：学生によって提出された音源を視聴中に実技指導者が得られた知見や気づいた点 ① 8月31日 ② 自宅 ③ 質問紙 ④ 川上

図4 第2ラウンド KJ法 A型図解－細部図解

テーマ：非対面型レッスンの功罪とは何か。

図5 第3ラウンドKJ法A型図解(細部図解) + 評価
①9月10日 ②自宅 ③質問紙 ④川上

